

「新しい時代」の老齡？：18世紀イギリス小説における老齡についての一考察

畑中 杏美

"New Age" for Old Age?: A Study on Ageing in 18th century English Novel

HATANAKA Azumi

Abstract

This paper aims to show the perception of old age and aging among people in 18th century England. The *philosophes* in the 18th century eagerly pondered their prospective futures and the perfection of humans. Some of them, especially William Godwin and Condorcet, even believed that the human life span would progressively get longer. Thomas Malthus wrote *An Essay on the Principle of Population*, denying the optimistic hypothesis of Godwin and Condorcet, but even Malthus partly agreed with the idea that human beings can develop a better breed of themselves. Since this was the Age of Enlightenment, these intelligent men believed in the power of science, and experiments might have assured them of the possibility of making a better breed of humans. However, Jonathan Swift did not share this ideal view. In his most famous fiction, *Gulliver's Travels*, Swift satirically described the immortal Struldbruggs in the Kingdom of Luggnugg. Although all these men in the 18th century believed in the power of reason, their attitude towards science resulted in different perceptions of old age among them.

キーワード：18世紀イングランド、啓蒙主義の時代、老齡、ジョナサン・スウィフト、『ガリヴァー旅行記』
key words: 18th century England, the Age of Enlightenment, old age, Jonathan Swift, *Gulliver's Travels*

0. はじめに

20世紀以降の現代社会において、人々の寿命が延びることが出生率の低下と同時進行的に起こる場合には、依存的とされる高齢の人々は若者世代の重荷であるようにすら考えられてしまうこともあるが、¹⁾ 現代医学が発展を続けていることを考えると、死を遠ざけようとする営みは今後も続くのであろうし、長生きすることに対する希望的な展望が無いわけではない。医療衛生分野の科学技術の進歩をうけ、出生者の幼年期・青年期・中年期における死亡が稀になり、多くのものが老年期まで生きることができるようになったのは20世紀特有の現象と言われているが、²⁾ 人間という生物が生き永らえ、死を乗り越えるための方法を考え出す長寿研究は、太古の昔から行われてきた。

たとえば、紀元前メソポタミアの叙事詩にすら死についての考察があるし、不老不死の靈薬の研究は中国の道教における錬丹術にも見出せる。また、昨今のファンタジー小説でも作中に登場し、しばしば取り沙汰される「賢者の石」を作り出そうとした錬金術師たちも、不老長寿研究の父祖と言えるかもしれない。³⁾

しかし、伝説上の妙薬を作り出す呪術のようなものや、儀式やまじないを通して起こる心理的な効果に頼る長寿研究を、必ずしも多くの人が盲信していたわけではなさそうである。それはベン・ジョンソン (Ben Jonson, 1572-1637) の『錬金術師』(*The Alchemist*, 1610) において、欲の皮の張った人々が「錬金術」に興味を示し、詐欺師のもとへやってくるという皮肉なプロットからも

読み取れる。少なくとも17世紀のイギリスにおいて「錬金術」は、一部の人々の熱烈な注目を集めはしても、知識ある人々にとっては信憑性が薄く、また恩恵を受けられそうにもない技術であったのであろう。錬金術のような呪術的な長寿研究は「理性の時代」と呼ばれる18世紀になると廃れていくが、18世紀の科学熱・理性信奉の精神は、人間が生き永らえることについても様々な説を戦わせていた。本小論では、18世紀小説における老いのネガティブなイメージを提示し、そのイメージが啓蒙主義の時代における時代の機運をどのように映し出していたのかについて考察する。

1. 啓蒙思想：18世紀社会の機運

17世紀後半のヨーロッパにおいて芽生えた啓蒙思想については、イギリスにおいてもフランシス・ベーコン (Francis Bacon, 1561-1626)、ジョン・ロック (John Locke, 1632-1704) など著名な思想家の著作を通してその隆盛ぶりを伺い知ることができるが、とくに18世紀において、啓蒙思想は、まさにその「啓蒙」(Enlightenment)という言葉が示しているように、人々の疑いや迷いを光で照らし、「フィロゾフ」(philosophe)と呼ばれる当時の知識人たちの「目覚め」をもたらしたとされている。⁴⁾ そのことは自然科学の進歩に顕著に表れた。アカデミーの設立、蒸気機関の発明にはじまる産業革命、さらには行政や福祉の面での改革など、18世紀の革新は目覚ましい結果を残したが、「教育ある」階級とそうでない階級の間には、生活の面で大きな格差があったため、新しい技術がもたらす新しい恩恵は、民衆レベルでは多少うさん臭い恩恵として受け入れられた。囲い込み運動など、長期的には利益をもたらしたが、当事者である農民には反感を覚えざるを得ない改革が始まっていたのである。⁵⁾

そして周知のとおり、啓蒙思想の高まりは、18世紀に科学革命を起し、自然科学の分野がめざましい発展をとげ、医学への関心も高まっていった。人文科学と自然科学の垣根が低く、医学と哲学もまた強く結びついていた時代であったので、身体的な健康と精神的・道徳的な向上の関連

性が注目され、事実、フィロゾフたちの多くが医学に関する興味を表明した。

理性の力において知性が向上し、目が開かれるように、人が生み出した科学技術によって人が生きる助けを得られるならば、民間に広まる迷信やまじない、さらには神をも頼らずに人間が生きていくことができるかもしれない。ある意味で、科学を新しい神として信ずる時代の機運が高まりを見せた18世紀という時代において、まさに「医学は実践の場における哲学であった。哲学は、個人と社会にとって薬であった」のである。⁶⁾

もっとも、当時の人々は関心や期待だけでなく、懐疑をもって科学に接さなければならず、すべての人々が科学の恩恵を受けられたわけではない。国王の接手術治療 (touching) が迷信であることが証明され、⁷⁾ 先進治療を騙るいかさま医師が横行するようになると、人々は盲目的に信じる姿勢を改め、理性を働かせ、疑うことを求められるようになった。ピーター・ゲイは「この懐疑主義には真実がこもっている」としたうえで、人口統計調査について次のように述べている。

人口動態調査はほんのわずかしかなされておらず、また信頼できるものではなかったが、それにしてもそこから判明した事柄は、われわれを安心させるようなものではなかった。ルソーは『エミール』のなかのあるページで、生まれる子供の約半分が8歳以前に死亡すると推定しており、またその数ページ後にはそのうちの約半分だけが青年期に達すると書いていた。これは、寿命に対するペシミズムが依然として続いていることを示しているのみならず、正確な数字に対する確信のなさが続いていることをも表している。⁸⁾

ゲイが示しているように、イギリスの人々の平均余命がすぐに延びるというわかりやすい変化はまだ見られなかった。過去の統計については様々な考察が残されているが、いわゆる先進諸国であっても1880年代までは平均余命が35歳程度であったという説もある。⁹⁾ また、イングランドに限っ

た統計でも、16世紀から17世紀ごろまでは平均余命が35歳であったとされている。これは40歳前後で亡くなるのが相応とされていたというわけではなく、平均を下げる要素、つまり乳幼児や子供の死亡率が依然として高かったことを示している。¹⁰⁾

しかし、即座に数字に表れるほどではないにせよ、医学の進歩は成果を示し始めていた。イギリスの人口は着実に増加し、1750年に650万人であったのが1800年には900万人になった。また、1749年から1759年に、新生児が15人に1人の割合で生まれてすぐ死んでしまっていたのが、1799年には1188人に1人という割合になった。また、母親の死亡率も、100人につき26.7人から2.4人に好転。疫病も姿を消したとされている。¹¹⁾ ロンドンでのペスト大流行という恐ろしい記憶はもはや過去のものとなり、人口の増加による食糧難という悲観的な未来を予測したマルサスでさえも、ペストなど病気の流行によって大勢の人々が短期間に命を落とす可能性は低いと考え、「疫病はやがてロンドンから完全に駆除されるだろう」と明るい見通しを示した。¹²⁾ 食糧の量が人口の増減を左右する最も大きな要因と考えるマルサスは疫病の影響を多少軽んじていたかもしれないが、数字による記録の正確さは現代と比べるとまだ覚束ないものであったことを差し引いても、このような記録やエッセイが残されているということは、医学の進歩を実感することができるようになった人々がいたことの証拠の一端を示していると言えるだろう。

もっとも、啓蒙主義の時代における科学熱はまだ、一般民衆の余命を延ばすだけの効力を持ってはいなかったかもしれない。だが、科学と理性を信奉する姿勢は、やがて、死の恐怖からの解放を目指すようになっていった。キリスト教的な思想からは罪とされる自殺の養護など、フィロゾフたちは死についてすら躊躇わずに議論の対象とすることを好んでいる節すらあった。啓蒙主義の思想家たちにとって、「よく死ぬことはそれほど問題ではなく」になっていったのだった。¹³⁾ 今すぐに結果が表れなくても、いつか理論が証明されれば、

人間がよりよく生きられるという快樂主義的で前向きな思想の高まりのなか、フィロゾフたちは、死ぬことの是非よりも生の楽しみの増加を考えるのに忙しかつたのである。

2. 科学は人間を改良しうるのか？

西洋社会における長寿研究は錬金術にはじまり、ルネサンス期には衛生主義ともいえる長寿命言説もみられるが、¹⁴⁾ それまでの長寿命言説が、原初的な生活など過去の生活に長寿の源泉を求めていたのに対し、18世紀のフィロゾフたちは、人間の進化を信じ、長寿の理想が未来に達成されるものと考えた。¹⁵⁾ なかでも、ゴドウィン (William Godwin, 1756-1836) やコンドルセ (Marie Jean Antoine Nicolas de Caritat, marquis de Condorcet, 1743-1794) は、理性による人間の進歩を信奉し、寿命もまた人間の進化とともに延びていき、人間の完成可能性は不死を達成させるものであると考えていた。ゴドウィンが人間の理性という精神的な要素に進化の要因を見出していたのとは対照的に、コンドルセは環境の改善や、医学の進歩にも人間の寿命が延びるであろう可能性を見出した。¹⁶⁾

ゴドウィンやコンドルセらがナイーヴなまでに人間の完成可能性を信じて未来を明るいものと予測したのとは反対に、彼らの理想的人間像に冷や水を浴びせたのがマルサス (Thomas Robert Malthus, 1766-1834) である。ゴドウィンがフランス革命に心酔した理性信奉主義者であったのに対し、マルサスは、フランス革命に対する嫌悪から、むしろ楽観的ともいえる可能性を否定する立場にあったイギリスの思想家の一人であった。マルサスは『人口論』において、人口の増加と食糧の増加のアンバランスを予測し、コンドルセやゴドウィンを批判するかたちで、非常に暗い未来予想図を描いて見せた。寿命が無限に延びると信じた2名の思想家を、マルサスは真っ向から否定し、「人間がこの世での不死にむかって接近していることは、いかにもありえない話」であるとした。¹⁷⁾ 人口の増加に食糧生産が追い付かないことを危惧していたマルサスにとって、人間の寿命が無限に延びるという説は夢物語どころか悪夢その

ものでしかなかったのであろう。だが、ゴドウィンやコンドルセを論敵としたマルサスですら、人間の進歩を部分的には信じていたようなのである。彼はレスター種の羊を例にとりながら、家畜の改良について述べ、¹⁸⁾ 人間の改良については次のように述べている。

たしかに、動物も植物も、ある程度までは改良可能である。それは誰も疑えまい。じっさい、明白で決定的な進歩がすでにあつた。しかし、だから進歩は無限であると結論するのはきわめてナンセンスだと思う。[...] さて、血統に配慮する形で人間を改良する方法は、劣等な種族の全体に結婚を禁ずることにならざるをえないので、けっして普及はしないだろう。じっさい、そうした方向の企てで成功したケースを、私は知らない。ただし、旧家のピッカースタッフ一族という例外もある。この一族は、血筋に注意したおかげで肌の色は白くなり、背も高くなったといわれる。とくに、モードと言う名の乳搾り女とたくみに血を混ぜたおかげで、その一族の主要な身体的欠点のいくつかを矯正することができたそうだ。¹⁹⁾

ゴドウィンやコンドルセラ、人間の完成を信ずる者たちが人間の寿命の無限を信じていたのとは異なり、マルサスは人間の進歩には限界があると考ええる。家畜の改良にすら限界があるのだから人間の改良にも限界がある、というのがマルサスの論拠になっているのだが、上の引用では、「血統」や「血筋」による人間の改良の一例を出したうえで、それが可能なものと考えている様子が見える。

ここでマルサスが念頭に置いている家畜の改良、とりわけ「血」による改良というのは、交配によって数世代にわたって「血統」を調整するということであろう。しかし、「血」による生物の改良という言葉は、当時の科学者たちが、動物の「血」を操る動物実験を行っていたことを想起させる。たとえば、若者の血液を輸血することによっ

て老いた身体に若返りをもたらそうとする目論みを、動物実験によって証明しようとしていた科学者もいたようなのである。ある実験では、盲目で動けない老いた犬に、若い犬の血を輸血したところ、輸血を受けた老犬が「2時間後には跳ねまわるようになった」とする文献も残されているようだ。²⁰⁾ 2時間よりももっと長い時間、その犬が若々しさを維持できたのかどうかは記録に残されていないように知る由もないが、18世紀の科学熱に浮かされた研究者たちの実験は、犬よりも優れた動物と彼らが信ずる人間の改良をも視野に入れたものだったのではないだろうか。啓蒙主義の時代に生まれた科学は、人間の命、そして生物の身体構造に対する並々ならぬ好奇心から、人間の手で改良可能な、ある種人工的ですからある人間観を生み出したのである。²¹⁾

3. 死なないだけの人と「弱くて頑固」な老人

啓蒙主義的な未来への展望は、18世紀の知識人のほとんどにとって、ある程度は明るいものであったようだが、18世紀の小説作品のなかには、人々の進化に対し、懐疑的でネガティブなイメージを呈しているものもある。勃興期の小説において老いが描かれたものとして最も有名なもののひとつは、ジョナサン・スウィフト (Jonathan Swift, 1667-1745) の『ガリヴァー旅行記』 (*Gulliver's Travels*, 1726) であろうが、スウィフトの作品では、加齢によるさまざまな機能の衰えが強調され、外見的にも内面においても衰弱してしまった者たちが、社会的に有用性の低い者、役に立たない者として描かれているのである。

『ガリヴァー旅行記』の語り手であり主人公のレミュエル・ガリヴァー (Lemuel Gulliver) は、小人の国や巨人の国、空飛ぶ国などを航海したのち、東洋の国ラグナグ (Luggnagg) にたどり着く。ラグナグのほとんどの人は、普通の人間と同じように歳を重ね、いつかは命の終わりがくるのであるが、この国には、ごく稀に生まれるストラルドブラグ (Struldbrug) と呼ばれる不死の民が住んでいた。はじめて不死の民の存在を知ったガリヴァーは、死なない運命に生まれついた人々

の幸福を興奮気味に誉めたたえ、自分がストラルドブラグとして生まれてきたなら成し遂げたいと思うことをあれこれと語りだすのだが、熱弁をふるうガリヴァーを、ラグナグの人々は冷めた様子で見つめ、彼の無知を笑いさえた。²²⁾ ラグナグで通訳をつとめてくれた紳士はガリヴァーの誤解を解いてやろうと、ストラルドブラグの生涯を目の当たりにしているラグナグの国の人々に長寿願望などないことを説明する。

When they [Struldbruggs] came to Fourscore Years, which is reckoned the Extremity of living in this Country, they had not only all the Follies and Infirmities of other old Men, but many more which arose from the dreadful Prospect of never dying. They were not only opinionative, peevish, covetous, morose, vain, talkative; but incapable of Friendship, and dead to all natural Affection, which never descended below their Grand-children. Envy and impotent Desires are their prevailing Passions. But those Objects against which their Envy seems principally directed, are the Vices of the younger Sort and the Deaths of the old. By reflecting on the former, they find themselves cut off from all Possibility of Pleasure; and whenever they see a Funeral, they lament and repine that others have gone to a Harbour of Rest to which they themselves never can hope to arrive. They have no Remembrance of anything but what they learned and observed in their Youth and middle-Age, and even that is very imperfect: And for the Truth or Particulars of any Fact, it is safer to depend on common Traditions than upon their best Recollections. The least miserable among them, appear to be those who turn to Dotage, and entirely

lose their Memories; these meet with more Pity and Assistance, because they want many bad Qualities which abound in others. [...]

As soon as they have completed the Term of Eighty Years, they are looked on as dead in Law; their Heirs immediately succeed to their Estates, only a small Pittance is reserved for their Support; and the poor ones are maintained at the public Charge. After that Period they are held incapable of any Employment of Trust or Profit; they cannot purchase Lands, or take Leases, neither are they allowed to be Witnesses in any Cause, either Civil or Criminal, not even for the Decision of Meers and Bounds.²³⁾

ガリヴァーが想像していた不死の民は、富と知恵と徳の向上によって、すべての人に尊敬される者たちだったが、それとは正反対に、ストラルドブラグたちは普通ラグナグの民が生きる限界の年齢とされている80歳を過ぎると、「死ぬに死ねないという絶望的な見通し」(the dreadful Prospect of never dying) から、死ぬことができる人々よりも「愚かしさや脆弱さ」(the Follies and Infirmities) を多く身に着けた者となる。愚かさや脆弱さ、貪欲さといったものはストラルドブラグだけでなく、老人の特徴として一般化されているばかりか、そのような性質を持つ者たちは、ラグナグでは憐れむにも値しない者として考えられていたのである。長く生きていても無欲・無私の境地にたどり着くことはなく、「若い連中がやってのける悪行と、普通の老人の迎える死」(the Vices of the younger Sort and the Deaths of the old) にあこがれを抱くという始末。他者の死は彼らにとって「憩いの港」(a Harbour of Rest) に見えるので、葬式を見ると自分たちにはそんな機会が来ないことを嘆き悲しむのである。記憶力も頼りなく、経験からくる知識の蓄えというものがないため、知恵を頼りにされること

もないばかりか、記憶をすっかりなくして「耄碌してしまったストラルドブラグ」(those who turn to Dotage) のほうがまだしも憐れみや介助を受けられるのであるという。

しかも、死ぬことがないはずの彼らは、80歳を超えた時点で「法的には死んだ者とみなされ」(they are looked on as dead in Law)、信用や利潤にかかわる職業にはつくことができず、判断力が問われるような場面においてはまったく必要のない人間とみなされてしまうのである。ちなみに、90歳を過ぎたストラルドブラグは髪の毛も歯も抜け落ち、容姿も甚だしく衰える。言うまでもなく、ここで描かれているのは死なないだけの人であり、ストラルドブラグは永遠に老い続けなければならない。ガリヴァーの想像していたのはいわゆる不老不死、永遠に若く健康でしかも命に限りがないことであったのだが、ストラルドブラグはたんなる不死、つまり、死なないというよりは、死ぬことができない民なのであった。

すっかり長寿願望を無くしてしまったガリヴァーに対し、ラグナグの国王は、ストラルドブラグを役立てる唯一の妙案として、ストラルドブラグを2人ほど、ガリヴァーの祖国に連れて帰ることを冗談交じりに提案する。彼らを見れば、ガリヴァーの祖国の人々もまた、不死の望みを抱くことがなくなり、死を恐怖する気持ちもなくなるのではないかというわけだ。ガリヴァーはできることならそうしたいと一度は考えたのだが、ストラルドブラグを国から出すことはラグナグの法によって禁じられていた。ガリヴァーはラグナグという国が定めたこの法の意図がたいへん腑に落ちたらしく、次のように述べている。

I could not but agree, that the Laws of this Kingdom relative to the Struldbruggs were founded upon the strongest Reasons, and such as any other Country would be under the Necessity of enacting, in the like Circumstances. Otherwise, as Avarice is the necessary Consequence of old Age, those Immortals would in time become

Proprietors of the whole Nation, and engross the Civil Power; which, for want of Abilities to manage, must end in the Ruin of the Public.²⁴⁾

ここでラグナグの法が「きわめて強固な理由」(strongest Reasons) に基づいたものだとガリヴァーが考えているのとは正反対に、ひとつ前の引用で見てきたように、強欲さや記憶の不確かさからくる管理能力のなさというものは、不死の民、ひいては老齢の人々一般の性質だと考えられている。しかも、社会的に不要な存在であるにも関わらず、ストラルドブラグという極端に醜い不死の民は、ガリヴァーにとって、社会を脅かしかねない者として、ある種の恐れすら抱かれているのである。滅多に生まれないとはいえ、死ぬということがないストラルドブラグは少しずつであっても増加する一方であり、彼らが増え続け、人口の多数を占めるようになれば、いつかは国を所有することになるかもしれない。そのような未来が来れば社会が滅びるであろうというガリヴァーの不吉な未来予測には、他者のみならず自己すら管理することのできないストラルドブラグに対する軽蔑が含まれている。

ここでストラルドブラグたちが、"strongest Reasons"による法で管理されていたとすると、ガリヴァーが恐れているのは"reason"の欠如ということなのかもしれない。"Reason"という言葉には、「根拠や理由」(OED) という意味だけでなく、「何等かの考えや行動を採用する際に働く知力、思考の過程における人間の精神を導く原理」(OED)、つまりは人間の理性、という意味も含まれていると考えられる。しかし、「理性の時代」である啓蒙主義の時代において、正しく理性を働かせるとは、ガリヴァーにとって、そしてスウィフトにとってどのようなことであつたのだろうか。

ストラルドブラグたちが暮らすラグナグ国のまえに、ガリヴァーはラピュタという空に浮かぶ島国を訪れていた。この国で家柄の高い人々は常に思索にふけているため他人の話聞いてお

らずいつも上の空で、「叩き人」(Flapper) と呼ばれる召使を常に従え、人前に出るとき思索から覚ましてもらえよう、口元や耳元を棒でたたいてもらうのであった。²⁵⁾ ラピュタが浮くしくみについては「哲学的な説明」(a philosophical Account)²⁶⁾ がなされるが、ここで使われている「哲学」という言葉は現代でいうところの「科学」と置き換えられる言葉である。²⁷⁾ スウィフトが他の18世紀の知識人と同様に「理性」の力を信じていたとしても、それは決して科学熱に浮かされた形のものではなく、むしろスウィフトはイギリスの科学アカデミーである王立協会、そして協会がこだわる科学的な方法なるものが実用にそぐわないことを批判しているのである。²⁸⁾

スウィフトが改良に懐疑的であることは、ラピュタを降りて、飛ぶ島の支配下に置かれる地上の国であるバルニバービ (Balnibarbi) に来たガリヴァーの体験からもうかがえる。ガリヴァーは、ラピュタの大公からの紹介を受け、ムノーディ (Munodi) というバルニバービの大公に紹介され、歓迎を受ける。大公は一流の人であるらしいのだが、バルニバービの首都ラガード (Lagado) で総督をつとめたのち、大臣たちの陰謀によって失脚したという過去を持っていた。みすばらしい家屋が立ち並び、荒れ放題の農地を見当違いのやり方で耕す貧しい農夫たちを目にしたあとで、ムノーディ卿の屋敷に連れられて行く道中、その領地の美しさにガリヴァーは感銘を受ける。

But, in three Hours travelling, the Scene was wholly altered; we came into a most beautiful Country; Farmers Houses at small Distances, neatly built, the Fields enclosed, containing Vineyards, Corn-grounds and Meadows. Neither do I remember to have seen a more delightful Prospect. His Excellency observed my Countenance to clear up; he told me with a Sigh, that there his Estate began, and would continue the same till we should come to his House. That his Countrymen

ridiculed and despised him for managing his Affairs no better, and for setting so ill an Example to the Kingdom; which however was followed by very few, such as were old and wilful, and weak like himself.²⁹⁾

ガリヴァーが驚き感動しているのとは対照的に、ムノーディ卿は「ため息をつきながら」(with a Sigh)、実は自分の土地の管理方法は国の人々から批判を受けており、自分のように「頑固で弱い年寄り」以外には真似するものなどない方法であろう、と自分の立場上の不利を打ち明けるのだった。彼の苦境は40年まえの出来事がきっかけとなってはじまった。その時、ラガードの人々の何人かがラピュタに行って、しばらく滞在したのち、科学的知識とやらを身につけてラガードに帰国したのである。ラガードの哲学(科学)の影響を受け、机上の空論を持ち帰って振りかざす人々が現れたのだ。彼らは「企画者養成アカデミー」(Academy of Projectors) を設立。それは500をくだらない実験室を擁するアカデミーで、所属する「企画者」(Projectors) はキュウリから日光を抽出する実験、糞便を食べ物に戻す実験、氷を焼いて火薬を作る実験など、さまざまな実験に精を出している。

「企画者」たちによる、社会の改良をよしとする思想は、ムノーディ卿のような、伝統的なやり方で社会を統治してきた人々との対立を生んだ。しかし、アカデミーの人々の「企画」(Projects) がどれ一つとして完成しておらず、そのため彼らの唱える「改良」とやらがいつまでたっても実現されないありさまからもわかるように、スウィフトがよしとしているのはムノーディ卿を代表とする伝統的立場であることは間違いないだろう。³⁰⁾ 少なくとも、このアカデミーを見て回った後で、ガリヴァーがバルニバービという国にとどまりたいという気にはならず、むしろイングランドに戻ることを考えさせていることから、彼が最新の科学とそれにまつわる新説といったものに感銘を受けたのではないことは明らかである。

ここでもう一度ストラルドブラグのことを思い出したい。彼らは徳の高い老人とはかけ離れた、むしろ死ぬことができないために普通の老人よりも道徳的に退廃した存在として描かれていた。その批判の視点は、アカデミーの人々に向けられた批判とは一見異なるようにも思われるが、実は、正しく理性を働かせる能力を失っているという点においては共通しているといえる。バルニバービの国で隅に追いやられているムノーディ卿は古いやり方にある意味では固執している、「頑固で弱い年寄り」であった。しかし、頑固さや弱さといった、作中では老人に共通の特徴であるかのように考えられている性質を身に着けながらも、ムノーディ卿は自分の領地を治め、豊かな実りをもたらす農地を守っている。彼はアカデミーの企画者たちが持ち合わせてはいない理性の持ち主であると言えるのではないだろうか。つまり、スウィフトが恐れているのは、歳を重ねて老いることそれ自体ではなくて、正しく理性を働かせる能力を失うことだったのではないだろうか。

スウィフトが18世紀ヨーロッパでさかんに議論された「新旧論争」において古代派・伝統派の人間であり、懐疑的かつ保守的な知識人であることは、『ガリヴァー旅行記』の作中のさまざまなエピソードから読み取ることができるが、若いころの自分は「ある種の企画者」(a Sort of Projector)³¹⁾であったと語るガリヴァーとスウィフトを重ね合わせるならば、出版当時58歳のスウィフトもまた、年を重ねることによって理性を得た人物であるのかもしれない。³²⁾ いわゆる老醜があまりにも強調されて描かれるストラルドブラグは、スウィフトがある種の老いに恐れすら抱いていたのではないかと考えさせる一因になりえるが、スウィフトはムノーディ卿を、スウィフトと同年のガリヴァーが尊敬を抱くような人物として作中に描き出した。このことから、スウィフトが理性の重要性を示しながら、ネガティブな老齢と必ずしもネガティブではない老齢のイメージの両方を作中に描き分けていた可能性を示しているといえるだろう。

3. おわりに

本小論では、啓蒙思想の華やかなりし18世紀のイギリスにおいて、科学の力が高齡や長寿にまつわる知識人たちの思想や言説に与えた影響について考えた。また、18世紀小説である『ガリヴァー旅行記』において、スウィフトが当時の科学熱を批判しつつ、理性を尊重するものとして老いを描き分けていた可能性を示した。「理性」による「目覚め」を経験したといわれる18世紀の知識人たちは、科学の力による人間の生活の向上、ひいては、科学による改良で人間を完成させることを信じ、それぞれの分野において功績を残してきた。しかし、科学信奉はときに、加熱傾向にあり、「科学のための科学」の様相を呈することもあった。そのような機運において、一部の知識人たちは人間の寿命が無限に延びると信じ、それに反論を投げかける者もいた。しかし、寿命の無限に反論する者においてすら、科学による人や社会の向上、また人間の改良という側面を信じている様子も読み取ることができた。

一方スウィフトは、18世紀的な科学熱には懐疑的な姿勢を見せた。彼が描く不死の民ストラルドブラグは老人嫌悪・加齢嫌悪の象徴として名高いが、『ガリヴァー旅行記』のなかで、スウィフトは、尊敬すべき老人の姿も描いていた。彼が批判の対象としていたのは「理性の時代」にあって理性を失い、科学を盲信しがちな知識人たちであって、それは彼自身が一度は革新派に傾倒した経験からくる、警告でもあったのではないかと考えられる。さらに言うならば、18世紀の科学熱のなかにあって、あえて虚構という形を通して、痛烈に同時代の社会を批判して見せたスウィフトの『ガリヴァー旅行記』は、人生経験を積んだスウィフトだからこそできた、直接的な批判を著すよりも理性的な問題提起であったのかもしれない。

※本研究はJSPS科研費(課題番号:18K12320)の助成を受けたものです。

注

- 1) バット・セイン。『老いの歴史』木下康仁訳、東洋書林、2009年。pp.350-352.
- 2) *Ibid*, 350.
- 3) これら長寿研究について東洋から西洋まで様々な例を挙げ、歴史的に整理したGrumanは「長寿命」(Prolongevity)をキーワードとする研究の先駆けである。本小論においても、長寿命言説に関する歴史的流れについてはGrumanを参考にした(Gruman, Gerald J. "A History of Ideas about the Prolongation of Life: The Evolution of Prolongevity Hypotheses to 1800" *Transactions of the American Philosophical Society*. Vol.56, Part9. 1996.)。
- 4) ピーター・ゲイ『自由の科学—ヨーロッパ啓蒙思想の社会史—』中川久定ほか訳。ミネルヴァ書房、1982年。p.2。啓蒙主義思想の知識人はイギリスだけでなくヨーロッパ社会に多数居たが、哲学者・科学者・政治家などの肩書を超えて思想家として活躍したものが多いため、ゲイは18世紀啓蒙主義思想の知識人をフランス語である「フィロゾフ」(philosophe)という言葉で「哲学者」の訳語としてではなく用いている(前掲書、p. ii)。以降、本研究でも18世紀啓蒙主義思想の知識人について言及する際、鍵括弧なしでフィロゾフという言葉を用いることとする。
- 5) *Ibid*, pp.3-6.
- 6) *Ibid*, p.13
- 7) *Ibid*, p.24
- 8) *Ibid*, p.15
- 9) Gruman, p.7.
- 10) Thane, Pat. *Old Age in English History: Past Experiences, Present Issues*. Oxford University Press. 2000. P.19
- 11) ゲイ、p.16
- 12) トマス・ロバート・マルサス。『人口論』齊藤悦則訳。光文社、2011年。p.95。
- 13) ゲイによれば、ヒュームは人間の「自殺する権利」を擁護したばかりか、死という陰気なテーマを扱ってすら陽気さを失わなかったという(ゲイ、p.75)。
- 14) ルネサンス期のヴェネチアの貴族、ルイジ・コルナロ(Luigi Cornaro, 1464-1566)は衛生主義者(hygienist)の代表といえよう。不摂生のため30代で成人病、40代で生死の縁をさまよった彼は医者のおすすめで始めた食事制限を病氣回復後も続け、102歳の長寿を全うした。(コルナロ、ルイジ。『無病法：極小食の威力』中倉玄喜編訳・解説、PHP研究所、2012年)。
- 15) Gruman, p. 75.
- 16) *Ibid*, pp.85-88.
- 17) マルサス、『人口論』、p.134.
- 18) *Ibid*, pp.133-134.
- 19) *Ibid*, pp.129-130.
- 20) Gruman, pp. 82-83.
- 21) これらの動物実験は、人間の創造や改造の物語の着想になることもあった。たとえば、18世紀における動物実験でもっとも有名なもののひとつは、イタリアの医師であり解剖学者のルイージ・ガルヴァーニ(Luigi Galvani, 1737-1798)がカエルの足の筋肉の収縮から、動物の筋肉運動と電気の関連性を発見したことであろう。メアリ・シェリー(Mary Shelley, 1797-1851)による人体創造の物語である『フランケンシュタイン』(*Frankenstein*, 1818)では、怪物を想像するヴィクター・フランケンシュタインが落雷の威力を目の当たりにして啓示を得るエピソードがしばしばガルヴァーニの実験と関連付けられる(阿部、pp.26-27)。『フランケンシュタイン』については、フランスの医師ラ・メトリーの『人間機械論』(1747)の影響も示唆される(廣野、pp. 219-221)。当時の人々にとって、科学の力は動物たちの命の犠牲をもって発展し、さらには人間の生死をも操る力を持つ力となるかのようにも思われたのであろう。ピーター・ゲイは *Age of Enlightenment* のなかで、デイヴィッド・ハートリーの『人間論』に触れ、身体と魂とのつながりを保つ「振動」の働きで人の言動を説明しようとする彼の理論を"a mechanical principle"と表現している(Gay, *Age of Enlightenment*, p.102)。啓蒙主義時代の実験から生まれたこうした機械的ともいえる人間観が加齢の概念に与えた影響については、別稿をしたためたい。
- 22) Jonathan Swift. *Gulliver's Travels*. Ed. Robert A. Greenberg. New York: Norton. 1970. pp.178-180.
- 23) *Ibid*, 181-182.
- 24) *Ibid*, 184.
- 25) *Ibid*, 133.
- 26) *Ibid*, 140.
- 27) 原田範行、服部典之、武田将明著。『「ガリヴァー旅行記」徹底注釈：注釈篇』、岩波書店、2013年。p.304.
- 28) *Ibid*, pp.293-294.
- 29) Swift, p.150.
- 30) 原田・服部・武田、pp. 318 - 319.
- 31) Swift, p.152.
- 32) 上の引用箇所からは、スウィフトが若かったころホイッグを名乗ったことや、アカデミー設立を訴えたという過去を振り返る視線が感じられる(原田・服部・武田、pp. 324-325.)。

参考文献一覧：

- Gay, Peter. *Age of Enlightenment: Great Ages of Man*. Amsterdam: Time-Life Books. 1966
- Gruman, Gerald J. "A History of Ideas about the Prolongation of Life: The Evolution of Prolongevity Hypotheses to 1800" *Transactions of the American Philosophical Society*. Vol.56, Part9. 1996.
- Thane, Pat. *Old Age in English History: Past Experiences, Present Issues*. Oxford University Press. 2000. P.19
- Swift, Jonathan. *Gulliver's Travels*. Ed. Robert A. Greenberg. New York: Norton. 1970.
- コロナロ、ルイジ。『無病法：極小食の威力』中倉玄喜編訳・解説、PHP研究所、2012年
- ゲイ、ピーター。『自由の科学—ヨーロッパ啓蒙思想の社会史—』中川久定ほか訳。ミネルヴァ書房、1982年。
- セイン、パット。『老いの歴史』木下康仁訳、東洋書林、2009年。
- マルサス、トマス・ロバート。『人口論』斉藤悦則訳。光文社、2011年。
- 阿部美春「フランケンシュタイン・コンプレックス」『身体で読むファンタジー：フランケンシュタインからものけ姫まで』吉田純子編。人文書院、2004年。
- 原田範行・服部典之・武田将明著。『「ガリヴァー旅行記」徹底注釈：注釈篇』,岩波書店、2013年。
- 廣野由美子『批評理論入門：「フランケンシュタイン」解剖講義』中公新書、2005年。